





らはこれらとしてお互いに向かい合っていかなければなりません、日韓の交流を太くし、その濃度を高めていくためにはいろいろな工夫が必要です。

私は、この「朝鮮通信使」に注目することが、一つの大切な着眼であると思うものです。過去の良い事例に学び、良い将来を築く。双方の前向きの姿勢をプラスのスパイラルに仕立てる。「良いところ探し」をしたらよいと思うのです。

国内では通信使の沿道となった地域の自治体等の集まりである「朝鮮通信使縁地連絡協議会」(事務局は対馬市)など、韓国には「(財)釜山文化財団」など、通信使の歴史を追究し、啓発を図る機関もあります。

皆さんも一緒に「朝鮮通信使って何だろう」って調べてみませんか？(注5)

(注1) 朝鮮からの外交使節団の来訪は、高麗あるいはそれ以前からあったと考えられるが、「通信使」と呼ばれる使節団の最初は1429年とされ、室町時代に3回、また秀吉の時代にも2回来訪している。ただ、室町時代においては倭寇の禁止の要請に来たものであったり、まして秀吉の場合には「呼びつけ」たりしたものであって、家康の再開した通信使とは性格を異にする。

(注2) 江戸時代の通信使は1607(慶長12)年に第1回、その後、1617(元和3)、1624(寛永元)、1636(寛永13)、1643(寛永20)、1655(明暦元)、1682(天和2)、1711(正徳元)、1719(享保4)、1748(寛延元)、1764(明和元)の各年来日し、最後は1811(文化8)年の第12回であった。

これらのうち最初の3回は厳密には「回答兼刷還使」、つまり秀吉の侵略に対する日本側のその後の措置を見極めるとともに日本に連行された捕虜を連れ戻すための使節とされた。また、最終回は、使節団は江戸までは来訪せず、対馬において両国の責任者が会合した。

各回にはそれぞれ使命が明示されており、例えば第3回を例にとれば「家光襲封祝賀、回答兼刷還」など、基本的には徳川の新しい將軍の誕生を祝うということを掲げていた。

使節団は、正使、副使、従事官の三使を筆頭に、たいていは400～500人規模で編成された。いずれの使節団もこれら三使のいずれかが公式の「使行録」(往訪の記録)を残している。

(注3) 1392年、太祖(李成桂)が高麗を倒して李氏朝鮮を興し、1910年の日韓併合まで続いた。最盛期は第四代世宗(1397～1450。在位は1418～1450。訓民正音の創製など多くの事績を残したとされる)の時代。

指導原理を儒教に求め、明に対しては「事大」、日本その他に対しては「交隣」の外交政策をとった。

1592～1598年には日本から(通常、日本では文禄・慶長の役、韓国では壬辰倭乱および丁酉倭乱といわれる)、1627、1636～1637年には満州族の侵略を受けた。

1897年、国号を「大韓帝国」に改めた。

(注4) 「誠信」ということについて、滋賀県長浜市高月町出身の雨森芳洲(写真2参照)は「交隣提醒」という著書の中で、次のような言葉を残している。「誠信と申し候は、実意と申す事にて、互いに欺かず争わず、真実を以て交



写真2：雨森芳洲肖像画／芳洲会蔵

わり候を誠信とは申し候。]

儒学者である芳洲は、1711年および1719年の通信使に  
対馬から江戸まで随行し、また朝鮮語ばかりでなく中国語も  
こなした対馬藩の外交官でもあった。

(注5) 朝鮮通信使の歴史を調べていくと、日本と朝鮮の歴史  
が遠い過去から繋がりを持って形成されてきていることがわ  
かる。例えば、室町時代の比較的良好な関係が秀吉の時代  
に悪化し、江戸時代に多分最良の時代を迎えたが明治になっ  
てまた日韓併合という事態を生じた…という歴史には、一つ  
ひとつの事象を担った人々は別々であっても、国対国という  
関係の形成についてはばらばらではなく、繋がりがあある（一  
貫しているわけではなく、大きく振れているのであるが）。

また、外交がその時々その国の置かれた立場によって  
左右され、北の敵と対峙するために南の日本と和する、ある  
いは大陸と経済交流をしたいがために朝鮮と和するなどの  
動機が、良好な国際関係形成の環境を築いた面がある。

さらにまた、朝鮮通信使関係の彼我の記録を参照すると、  
皆が皆というわけではないが、両国ともに相手国を見下そう  
という意図がそこそこ垣間見え、国際関係のきれいごとで  
いかない面も見て取れる。

したがって、朝鮮通信使を学ぶことは、歴史の一事だけ  
を学ぶにとどまらず、歴史をできるだけ客観的に、幅広く捉  
えるという面でも勉強になる。

## 朝鮮通信使縁地連絡協議会について

朝鮮通信使は、対馬から江戸まで行列しながら各地に立ち寄り、諸大名や民衆の歓待を受け、鎖国の時代の日本において、数少ない国際交流を行い、文化的にもさまざまな影響を各地に残してきました。

こうした朝鮮通信使にゆかりのある地域が集まり、朝鮮半島との友好の象徴でもある朝鮮通信使を再認識し、官民共同の広域的なネットワークを形成するために、「朝鮮通信使縁地連絡協議会」が、1995年に長崎県厳原市（現対馬市）において結成されました。以来、毎年交流大会が開催され、これに合わせてシンポジウムや行列再現など、朝鮮通信使を核にした地域づくりが行われてきました。朝鮮通信使が開始されてから400周年に当たる2007年には、協議会を中心にさまざまな記念事業が実施されました。

現在、協議会は、対馬市を事務局とし、日光市、静岡市、大垣市、長浜市、近江八幡市、彦根市、京都市、神戸市兵庫区、たつの市、瀬戸内市、福山市、呉市、上関町、下関市、新宮町、壱岐市の17自治体と関係団体、個人により構成されています。

朝鮮通信使縁地連絡協議会HP <http://www.enchiren.net/>

# 二十一世紀の朝鮮通信使

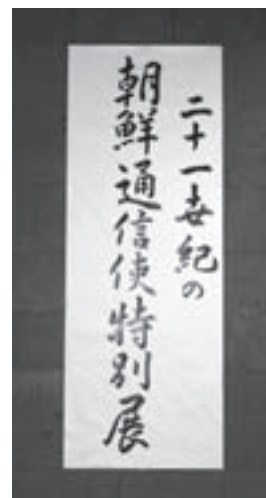
(財)自治体国際化協会交流支援部交流親善課

21世紀の新しい文化交流時代を迎え、日本と韓国の人・文化の交流に大きな影響を与えた朝鮮通信使の歩みをたどる「二十一世紀の朝鮮通信使～囲碁で信を通わせあう～特別展」が、21世紀の朝鮮通信使実行委員会（委員長：木谷正道氏）の主催（韓国大使館共催）により、2010年7月13日（火）から17日（土）まで、韓国文化院（東京都新宿区）ギャラリーM1にて開催されました。

本展では、「朝鮮通信使饗応七五三図絵巻」が特別公開されたほか、通信使の歴史やゆかりの地で行われてきたさまざまな交流やイベントの紹介、通信使にまつわる人形などの資料展示があり、5日間を

通し多くの来場者で賑わいました。また、会場内には囲碁体験や通信使衣装の試着コーナーなどもあり、さまざまな形で通信使を知り、感じ、体験できる催しとなりました。

饗応七五三図絵巻は、1810年、小笠原大膳大夫屋敷（江戸）での“饗応伝授の習い”（予行演習）での内容が納められたもので、



特別展のタイトル



饗応七五三図絵巻

朝鮮通信使をもてなした料理や、通信使の様子が非常に細かく描かれています。この絵巻は数奇な運命をたどり、幕末の戊辰戦争の折に北海道・江差の商家で名主の合田家に渡り大切に保管されていたのですが、囲碁を通じた日韓交流やまちづくりの市民活動を行ってきた木谷正道氏(注)が数々の縁によりこの絵巻に出会い、絵巻制作200年に当たる今年、囲碁と朝鮮通信使をテーマに各種文化交流事業が企画されました。

朝鮮通信使が、日本を訪れた際、囲碁を打ったと見られる記録も残っており、何百年も前に交流のタネとなった囲碁が、今なお両国共通の文化として残り、両国をつなぐ役割を果たしています。

今年10月には、韓国の囲碁棋士らを日本に招き、囲碁を通じて市民との交流を深める催しが、日本各地で開かれます。鎖国の江戸時代に庶民にまで異文化に触れあう機会を与え、囲碁や書という共通する



展示会の様子、通信使衣装の試着もできる



通信使の衣装を着て碁を打つ実行委員長の木谷氏(左)

文化により国際交流を行った「朝鮮通信使」を振り返りながら、日韓両国共通の伝統文化、囲碁が紡ぐ新たな親善と交流の機会となることでしょう。

(注) 木谷正道氏は、多くの著名棋士を育てた故・木谷実九段の三男。木谷道場で育った棋士の中には、韓国棋院を設立した故・趙南哲九段をはじめ、韓国棋士も数多い。

### 「二十一世紀の朝鮮通信使」今後のイベント

\*日韓トップ棋士対局／武宮正樹九段 対 曹薫鉉九段  
10月8日(金) 16:00～韓国文化院  
対局のあと、出演棋士によるトーク&記念コンサートも行われます。

#### 【各地でのイベント】

\*10月2日(土)～3日(日) 鞆の浦イベント(福山市主催)  
日韓トップ棋士対局、百面打ち囲碁まつり、交流会など

\*10月5日(火)～6日(水) 彦根イベント(彦根市主催)  
日韓トップ棋士対局、交流会など

\*10月10日(日) 平塚イベント(平塚市主催)  
千面打ち囲碁まつりへの日韓棋士・ファンの参加、交流会など

#### 〈問い合わせ先〉

21世紀の朝鮮通信使実行委員会事務局

TEL&FAX : 0463-35-7512

E-mail : staff@hira-taishin.jp